

事例 No.58 岩手県陸前高田市生出地区

1. 地域の概況 (基礎データ)


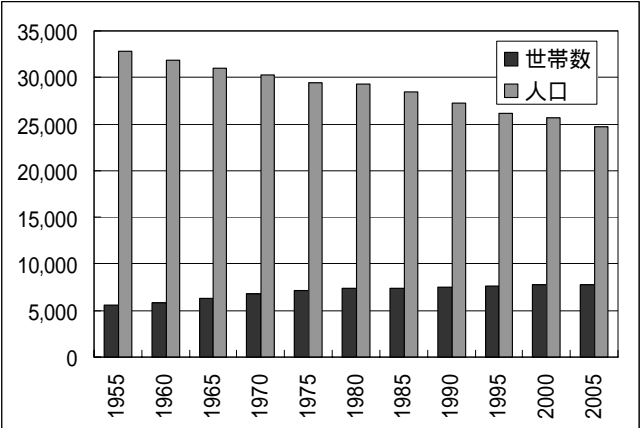
| | | |
|-------|-------|--|
| 範囲・位置 | 範囲 | <ul style="list-style-type: none"> 岩手県陸前高田市生出地区 |
| | 位置 | <p>海岸から十数 km の山間部に位置する</p> <ul style="list-style-type: none"> 岩手県南部の陸前高田市中心部から約 17km 離れた山間部に位置する。 |
| 自然条件 | 地形・水系 | <p>山々に囲まれた急峻な地形である</p> <ul style="list-style-type: none"> 海岸から比較的近いにもかかわらず、周囲を原台山（894.7m）、生出山（684.5m）、陣ヶ森（583.6m）などの山々に囲まれた急峻な地形であり、生出川に沿ったわずかな平地に集落や農地が位置する。 集落にある「清水の湧口」は名水として知られ、「いわての名水 20 選」に選ばれている。 |
| | 植生 | <p>大半が樹林地であり、標高に応じて人工林・二次林が斑状に分布する</p> <ul style="list-style-type: none"> 地区の大半が樹林地であり、川沿いや谷筋の低地にはスギ人工林、山腹にはコナラ二次林、より標高が高い場所にはアカマツ植林やミズナラ等の二次林が分布する。 |



図 生出地区の位置・地勢
(出典：生出地区コミュニティ推進協議会 HP)



図 生出地区の植生 (出典：第3回自然環境保全基礎調査)

| | | | |
|------|------------------|--|---|
| 社会条件 | 土地利用 | <p style="text-align: center;">過去の生活・生業によって培われた、標高に応じた土地利用の痕跡が残されている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生出地区を含む気仙川の流域は、古くから良質の材を産出する林業地域として知られ、川沿いの低地等へのスギ植林や、標高が高い場所へのアカマツ植林が行われてきた。 ・ また、地域の特産品である木炭生産（後述）を通じて、その原材料林であるコナラ二次林が形成・維持されてきた。 ・ このように、過去の生活・生業において、自然環境の特性を踏まえた土地利用が行われ、その痕跡が標高に応じた植生として今日まで引き継がれている。 |  |
| | 人口 | <p style="text-align: center;">過疎化・高齢化が進んでいる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 17 年国勢調査結果に基づく生出地区の世帯数は 113、人口は 364 人であり、過疎化・高齢化が進んでいる。 ・ 陸前高田市全域においても、過疎化・高齢化が進んでおり、平成 17 年国勢調査結果に基づく高齢化率は約 30%に達している。 |  <p style="text-align: center;">図 陸前高田市の人口推移 (出典：国勢調査)</p> |
| | 産業（主に農林業） | <p style="text-align: center;">古くから林産物の生産が盛んであり、木炭等が特産品となっている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生出地区では、「たたら製鉄」を契機として木炭の大量生産が始まり、その後も技術改良が重ねられ、硬質のコナラ黒炭が特産品となった。 ・ また、気仙川（生出川が下流で合流する川）の流域は、温暖で肥沃な土壤に恵まれており、古くからのスギ・アカマツ等が植林されてきた。特にスギは、古くから「気仙スギ」と呼ばれ各地で高い評価を得ている。 <p style="text-align: center;">戦後の担い手減少と社会情勢の変化により、林産物の生産量が大きく減少している</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かつて地域経済を支えていた林産物の生産は、地域の過疎化・高齢化と、燃料革命や外国産林産物の輸入による需要の減少により大きな打撃を受け、生産量が大きく減少している。 ・ 特産品である木炭生産は、最盛期の昭和 35 年には 1,500t の生産量を誇ったが、現在ではわずか年間数 10t 程度まで落ち込んでいる。 | |

2 . 地域における里地里山の保全・活用の取組

～木炭生産の継承と、それを活かした「交流」や「新たな木炭利活用」の取組～

1) 伝統的な里地里山の利活用（硬質木炭の生産）

- ・ 生出地区は、かつては平泉の黄金文化を支えた玉山金山を中心とする金採掘の一翼を担い、1600年代には炯屋（鉄沙を「たたら」にかけて鉄をつくる所）を業とするために、膨大な量の木炭生産が行われるようになった。近代製鉄が始まると木炭の需要は減少したが、地域の人々は木炭の品質向上に取り組み、全国有数の技術を習得して競争を勝ち抜き、戦後の1960年頃には年間生産量約1,500tを誇る一大生産地となった。
- ・ その後、燃料革命により木炭需要が大きく落ち込み、また、社会情勢の変化による過疎化・高齢化の等の影響もあって、現在では年間数10tほどしか生産されなくなっているが、60歳以上の住民のほとんどが炭焼き技術を身につけている。
- ・ 生出地区の木炭の特徴は、少量窯で手間ひまをかけて製炭されることで得られる「硬度の高さ」にある。火力が強いという特長がありながら長持ちするため、茶炭としての利用や焼鳥等の料理用として非常に優れている。この硬質炭の製炭技術は、先人たちの改良の積み重ねによって獲得・継承されてきたものであり、排煙と窯口の酸素のバランスを煙道に工夫するなど、地域独自の経験とノウハウに支えられている。
- ・ 木炭の原材料はコナラ、クヌギ、ミズナラ等であり、長年にわたる炭焼きの歴史の中で形成・維持されてきた地域の二次林から採集されている。

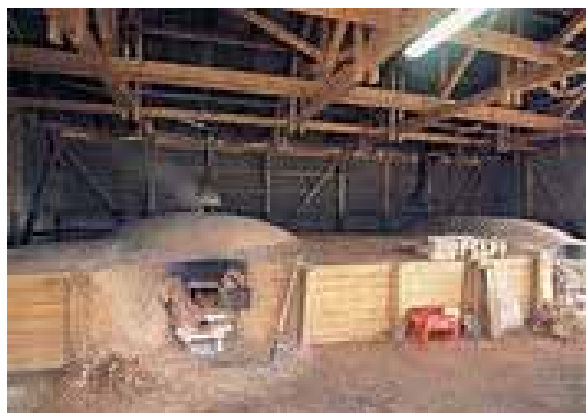


図 ホロタイの郷「炭の家」の体験用炭窯
(出典：生出地区コミュニティ推進協議会 HP)

2) 現在の里地里山の保全・活用の取組

取組の実施主体・体制

- ・木炭生産量の減少とともに活力が低下し、過疎化・高齢化が進んでいた生出地区では、住民が「このまま何もしないで見ていて良いのか」という危機感を持つようになった。
- ・昭和 55 年に、それまで個別に活動していた地域の各組織を一元化した「生出地区コミュニティ推進協議会」(以下、「協議会」) が設立され、昭和 62 年から、地域の特産物である木炭を題材とした「おいで木炭まつり」を開始した。
- ・協議会は、木炭まつりに加えて、グリーン・ツールズムによる都市・農村交流やバイオマス利活用の取組など、新しい活動に挑戦し続けている。
- ・また、協議会は、陸前高田市が生出地区に整備した交流促進センター「ホロタイの郷 炭の家」の管理運営を受託している。

表 陸前高田市生出地区における里山林の保全・活用の主な実施主体
(: 主な主体 : 関与している主体 : 過去に関与していた主体)

| | | |
|-------------------------------|---|--|
| 1. 地域コミュニティ (土地所有者、集落、組合等) | | ・地域コミュニティ組織である「生出地区コミュニティ推進協議会」が取組実施主体となっている。 |
| 2. 外部人材 (NPO, NGO, 企業、学校等) | | ・首都圏の大学と連携した林業体験など、都市住民との交流を推進している。 |
| 3. 行政機関 (地方自治体、都道府県、国等) | | ・陸前高田市は、交流促進センター「ホロタイの郷 炭の家」を整備し、協議会に運営を委託している。 ・また、イベント・プログラムの開催等において各種支援を行っている。 |
| 4. 多様な主体が参加・連携する組織体 | - | (取組は各主体の連携によって実施されており、多様な主体が参加・連携する組織体は設けられていない。) |
| 5. その他 | - | - |

取組の目的・理念

- ・当初の取組目的は、過疎化・高齢化で活力を失いつつあった地域の活性化であった。
- ・一方、取組のテーマとして選んだ「木炭」が、里地里山の生活・生業に基づく環境共生型エネルギーであることを踏まえ、近年ではバイオマスエネルギーの活用に取り組むなど、里地里山の資源利活用による循環型社会の形成にも力を注いでいる。

取組の経緯

- 昭和 55 年 ・「生出地区コミュニティ推進協議会」の設立
- 昭和 62 年 ・第 1 回「おいで木炭まつり」の開催(以降、毎年開催)
- 平成 2 年 ・オリジナル木炭自動車「たんたん号」を開発
- 平成 10 年 ・市が交流促進センター「ホロタイの郷 炭の家」を整備、協議会が管理運営を受託
- 平成 14 年 ・「ホロタイの郷 炭の家」に茅葺き水車小屋を整備
- 平成 15 年 ・立教大学による林業体験の受け入れを開始(以降、毎年実施)
- 平成 19 年 ・移動式木炭発電機を開発

主な取組内容

【おいで木炭まつり】

- ・昭和 62 年より毎年 1 回・10 月の最終日曜日に開催されており、平成 20 年で 22 回目を迎える。
- ・水、木炭、雑穀などの生出地区の資源を生かしたイベントで、炭だけではなく、農産物、山菜 等の販売も行っている。



図 「木炭まつり」の様子
(出典：生出地区コミュニティ推進協議会 HP)

【炭焼き体験】

- ・「ホロタイの郷 炭の家」の炭窯で、地元の炭焼き名人の指導による炭焼き体験を実施している。
- ・半日や 1 日の簡単な体験から、全ての作業を体験でき「炭焼き名人心得」の修了証書が授与される「10 日間コース」まで、参加者の希望に応じたプログラムが用意されている。
- ・生出小学校の児童たちも、授業の一環として炭焼き体験を行い、地域の文化を学んでいる。



図 小学生による炭焼き体験学習の様子
(出典：生出地区コミュニティ推進協議会 HP)

【都市・農村交流】

- ・木炭まつりの成功と、交流促進センター「ホロタイの郷 炭の家」の整備を契機として、グリーンツーリズムによる都市・農村交流に取り組んでいる。
- ・平成 15 年から、立教大学と連携して学生による林業体験を受け入れている。このプログラムは立教大学学生部が主催し、「ホロタイの郷 炭の家」を拠点に、学生達が炭焼きや枝打ち・間伐作業を体験しながら、地域にホームステイして住民たちとコミュニケーションを深めている。



図 大学生による林業体験の様子
(出典：生出地区コミュニティ推進協議会資料)

【循環型社会の構築に向けた取組】

- ・ 生出地区では、平成 2 年にオリジナルの木炭自動車を製造するなど、従来から木炭を活用した循環型社会の構築に向けた取組を進めてきた。
- ・ さらに、平成 18 年から、東北大学の技術支援を受けながら地場産木炭を活用した「木炭発電車」(移動式の木炭発電装置)を製作し、林業での活用や災害発生時の電力供給などの実証実験を行っている。
- ・ この成果は、「循環型システム実証事業報告」として広く公開され、循環型社会づくりに取り組む地域が互いに交流しながら、循環型社会の構築が推進・発展していくことを目指している。



図 循環型システム実証事業 (上：事業概要 下：木炭発電車)
 (出典：生出地区コミュニティ推進協議会資料)

3 . 取組による成果

1) 里地里山の土地利用・管理の効用

自然の恵みとそれに根ざす生業・生活が今日まで継承されている

- ・先人達が培ってきた高い製炭技術が継承されており、今日も地域の特産物として高い品質の木炭が生産されている。
- ・また、木炭以外にも、谷底で得られる農産物、気仙スギ、湧水(清水の湧口)、生出川の豊富な川魚(ヤマメ、イワナ、カジカ、サンショウウオ等)など、自然の恵みを活かした生活・生業が営まれてきた。
- ・上記のような自然環境の持続的利用を通じて、二次的自然環境を主体とする土地利用が形成され、今日まで継承されている。

近年の里山管理の取組を通じて、再生又は新たに獲得された効用がある

- ・「木炭まつり」を続けているうちに、それまで地域に埋もれていた若者たちが、自分の企画や意見が祭りに反映されるのを見て積極的に取り組むようになってきた。
- ・都市・農村交流(グリーンツーリズム)の取組が進められ、大学生が継続的に林業体験を訪れる等の成果が現れ始めている。
- ・循環型社会の構築に向けて、木炭の利活用を推進するための新しい技術開発(木炭自動車、木炭発電)が進められている。

表 陸前高田市生出地域における里地里山の土地利用・管理の主な効用

| 項目 | 過去からの土地利用・管理で培われてきた効用 | 近年の取組を通じて再生・獲得された効用 |
|--|---|--|
| 1. 生物多様性保全(生物種・生息環境・土地利用) | ・木炭生産などの自然環境の持続的利用を通じて、二次的自然環境を主体とする土地利用が形成され、今日まで継承されている。 | |
| 2. 資源の持続的利用・生態系サービス(水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO2) | ・木炭生産が今日まで継承され、地域の特産物となっている。 ・その他、農産物、気仙スギ、湧水、川魚など、自然の恵みを活かした生活・生業が営まれてきた。 | ・木炭の利活用を推進するための新しい技術開発(木炭自動車、木炭発電)が進められている。 |
| 3. 人間の福利への貢献(人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識) | - | ・地域の若者たちが、木炭をテーマとした地域づくり活動に積極的に取り組むようになってきている。 ・都市・農村交流の取組が進められ、大学生による林業体験等の成果が現れ始めている。 |
| 4. 歴史・文化の継承 | ・先人達が培ってきた高い木炭製造技術が継承されている。 | |

2) 外部評価

協議会による地域資源(木炭)を活かした地域活性化の取組が評価されている

- ・平成 8 年 愛ランドいわて県民運動協議会「IWATEふるさとづくり賞」
- ・平成 8 年 (財)あしたの日本を創る協会「ふるさとづくり振興奨励賞」
- ・平成 9 年 岩手県活力ある我がむらづくコンクール「優秀集落」
- ・平成 15 年 岩手県中山間地域モデル賞
- ・平成 19 年 岩手県元気なコミュニティ 100 選に認定
- ・平成 20 年 国土交通省「地域再生を担う人づくり支援調査」モデル地区に選定

4 . 今後の課題

交流人口の拡大を定住に結びつけるための取組

- ・ 生出地区では、現在では4千人以上が訪れるまでになった「木炭まつり」や、立教大学等と連携したグリーンツーリズムの取組により、着実に交流人口を拡大させている。また、これらの取組を通じて地元の若手人材の意欲が向上している。
- ・ 一方で、地域の過疎化・高齢化は依然として進行しており、このままでは炭焼きの後継者が不足し、伝統技術が継承されなくなる恐れもある。
- ・ 今後は、グリーンツーリズムから、Iターン・Uターンにつながるような流れを生みだし、炭焼きの後継者を育てるための取組が必要とされる。

持続的な地域づくりに向けた里地里山の物質循環の再構築

- ・ 生出地区では、伝統的林産物である「木炭」に着目して地域づくりを進めており、地域外への販売を行っている。また、資源循環の形成の観点から、「木炭自動車」や「木炭発電」といった新しい技術の実証実験を進めている。
- ・ 今後、木炭による地域活性化の取組をさらに進め、持続的な地域づくりに結びつけていくためには、伝統的技術の継承・振興と新しい技術開発の両面から木炭の需要を掘り起こし、里地里山の物質循環の量的拡大を図ることが求められる。